

## 『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

### 平成 20 年度派遣報告書

——インドネシア・ハサヌディン大学、マカッサル語、H20. 8. 3—H21. 2. 2——

平成 19 年度入学  
大学院アジア・アフリカ地域研究研究科  
博士課程 2 回生  
竹安裕美

#### 自身の研究テーマについて

本研究は、インドネシア、スラウェシ島南スラウェシ州のマカッサル人村落の貧困状態にある村人達の経済的な依存関係を調査し、彼らの経済状況を明らかにすることを目的とした。

小王国時代のブギスマカッサル人社会では、王族や貴族と村人との間にパトロン-クライアント関係が存在しており、村人は貴族の庇護のもとにあった。しかしオランダ植民地支配やインドネシアの独立をはじめとする、その後の歴史状況のなかで、この関係は大きく変化していった。その過程の中でパトロンを失った村人達は、多くの場合、都市部への出稼ぎや金貸しからの借金をおこなうようになったことが報告されてきた。このうち村落内部でおこなわれる借金については、利子が銀行等の公的機関に比べ高率であり、村人の経済状況をさらに悪化させている原因の一つとされている。その一方で、金貸しが村人の偏った収入パターンを補完する役割を担っているとする先行研究もある。本研究は、南スラウェシ州において貧困地域に指定されているジェネポント県の一農村を例に、借金をめぐる村人と金貸し側との関係の細部を明らかにすることを通して、村人の経済状況の実態を探るものである。

#### 研修言語の概要

マカッサル語は南スラウェシ州の主要民族の一つであるマカッサル人の言語である。マカッサル語は 3 つの方言、すなわちラキウン Lakiung (ゴワ県、タカラール県)、トゥラテア Turatea (ジェネポント県、バンタエン県)、コンジョ Konjo (ブルクンバ県、シンジャイ県) に区分される (括弧内は主に話されている行政県名)。このうちラキウンが標準マカッサル語とされる。このため本語学研修でもラキウンが用いられた。

#### 語学研修の内容について

研修期間前半の 3 ヶ月 (8~10 月) はハサヌディン大学文学部での授業、後半の 3 ヶ月 (11 月~翌年 1 月) は調査地であるジェネポント県の農村に住んでの現地研修を行なった。

前半のハサヌディン大学での研修は 1 コマ (1.5 時間) の授業を月曜日から金曜日まで毎日 1 コマ実施、3 人の教師が持ち回りで担当、マンツーマン形式で行なった。



作文の添削指導をする Asriani 先生



様々な雑談で楽しませてくれた Kahar 先生

月・火曜日担当の Musulimat 先生からは文章表現、水・木曜日担当の Asriani 先生からは基本的文法、金曜日担当の Kahar 先生からは語彙を学んだ。途中からは今後の調査で必要となるであろう日常会話表現を毎日宿題として作文し、先生に添削していただいた。この間合計 30 コマの授業を受講、作成した単語リストは 1,000 を超えた。

後半の実地研修では、ジェネポント県の調査村（Tamalatea 郡東 Turatea 村）に住み、毎日村民との会話を通してマカッサル語の語彙や会話表現など学んだ。具体的には、会話の中で知らない単語があった場合、その意味を村人に教えてもらい、村人の前で反復練習をおこなった。

また、月に一度のペースでマカッサル市にでかけ、2~3 コマの授業を受講したり、村人の説明では理解できなかった点について Musulimat 先生に質問をおこなった。

### 研修期間に印象に残った体験や経験

前半の授業では先生たちは単に語学を教えるだけでなく、雑談のような形で私の調査地の慣習などについて様々な話をしてくれた。特に当該地域の村人達が、資産を持っていることを誇示するために金の装飾品（首輪、腕輪など）を普段から身に付けているという話は、実際に村に移動した際、まさにその通りであったため非常に興味深かった。

後半の実地研修では村人たちが先生であった。彼らにはマカッサル語を学ぼうとする外国人がとても珍しかったようで、私が単語をメモしたり発音を繰り返すたびに大喜びしていた。また正しい発音を何度も繰り返してくれるなど、非常につきあいの良い先生たちばかりであった。

村人から話を聞く時も、自分の調査対象分野に関する現地語彙が増えてくると（たとえば分益小作制度「tesang」など）、こちらの質問も村人側の返答もよりスムーズなものになっていくなど、現地語習得の重要性を再認識した。



熱心な先生だった東 Turatea 村の村人たち

### 目標の達成度や反省点について

達成度：日常会話については、使用頻度の高い簡単なやりとりは習得できたが、少し長く、複雑な文章になると十分に理解できない、という程度である。語彙についても学んだ単語数は 1,000 語を超えたが、そのうち自分で使いこなせるまでになったものはまだわずかである。

反省点：特に村人との会話の際、つついインドネシア語に頼ってしまい、はじめは出来るだけマカッサル語を使うようにしていたものの、気がつくとインドネシア語で会話していたということが多かった。また村では「語学を勉強する時間」を意識してつくることができなかつたため、メモはしたが暗記できていない単語が増える一方であった。「村に住み毎日マカッサル語に浸っていれば自然と上達するだろう」と心のどこかで高をくくっていたことも勉強する時間をつくれなかつた原因の一つであろう。少しでも早い上達を目指すならば、村でもせめて単語を暗記する時間を意識して取るべきであった。